

芝浦工業大学志村教授との懇談会 議事録

○日時：令和元年7月8日（月）午後1時30分から午後2時45分まで

○場所：与野本町小学校東校舎1階ミーティングルーム

○配布資料

- ・第2回運営準備協議会配布資料一式

○出席者

芝浦工業大学：志村教授（さいたま市立与野本町小学校複合施設整備事業アドバイザー）、
志村研究室学生

運営準備協議会委員：小笠原会長、松本委員、渡邊委員、佐田委員、森委員、金子委員

事務局：中島課長補佐、田中主査（記録）

【森委員】

4月に着任した時から目に見えて工事が進んでいるが、何ができるのかを地域の方も子どもたちも意外に知らないで、先日のPTAの集まりの際に、事務局から提供してもらった資料を配布した。新しくきれいな施設ができることについては、保護者も子どもたちも、地域の方もとても喜んでいる。来年3月の完成を楽しみにしている。

【事務局】

先生から挨拶をお願いしたい。

【志村教授】

今年度もアドバイザーを引き受けた。運営準備協議会は今日が2回目ということで、1回目は事務的な集まりだったと聞いている。午前中に2回目の協議会が開かれたが、スケジュールの調整ができず、出席できなかった。こういったことでは、アドバイザーとしての責任が全うできないし、これまで頑張ってきた施設の計画作りがどうになってしまうのかということもあるので、こちらに伺い、皆さんにも集まっていたいただいた。

少し経緯の話をする、昨年の意見交換会から1年近く空いてしまった。昨年度、アドバイザーとして何をしていたかというと、与野郷土資料館の計画のことで結構やりとりをした。主に、ボランティアの方々に来ていただけるのではないかと考えている第1展示室のことだった。9月の意見交換会の時にも、展示室の入口部分の話が結構あったと思うが、お母さんや子どもたちが、わざわざ扉を開けてというのは難しいし、ベビーカーを押しているお母さんが扉を開けて入ってくるというのはまず不可能である。低学年の子ども達にとって防火扉は結構重いので、その辺りはなんとかならないかという話をした。

第1展示室には様々な案があり、農機具を大きく展示するという案もあった。農機具を大きく展示されても与野本町の歴史と関係がないのではないか。また、鎧兜を着られるようにするという案もあった。子どもたちは喜ぶかもしれないが、与野本町の歴史と合うのか、疑

間だった。アドバイザーとして苦勞するところがあった。

そういったところ調整されて、市の担当課の方々にも頑張ってもらっていると思っており、複数の部署が関係してくるわけで、これは大変である。自治体というのは基本的には、縦割りとなっており、これは宿命である。組織の機構がそうなっている。これを横断的にいかにするかというと、これは市の内部だけではなかなか難しい。そこで市民が出てくるだとか、私のような学識が出てくることになる。事務局は頑張っていると思うが、やはりそういった縦割りになってしまう宿命がある。今年も午前中に話があったと思うが、カフェのことなどもあるので、できるだけいい方向に行って、地元の方も期待があると思うので、本当にワークショップから頑張ってきたので、最後出来上がって、あれ、ということになってしまうと、一体なんなのかと地元の方は思うだろうし、さいたま市としての評価にも関わる。

さいたま市は公共施設マネジメント計画を含めて、全国の自治体に先駆けて、公共施設の再編を進める自治体である。この与野本町小学校を中心とする複合施設も全国から注目されているとあっていいと思う。だから、評価が下がってしまうと、これから全国各地で進んでいく公共施設の再編も、どうなってしまうのかということになる。色々な自治体からの相談を受けており、例えば、隣の上尾市にも協力することがあるので、与野本町小学校が良いものにならないと、やはりおかしくなってしまうと思う。

公共施設再編もマネジメント計画を作った6年前と状況が変わってきているところがあり、しばらく人口の増加が続く。さいたま市は北関東の核、北の玄関であるわけである。大宮駅東口の大きなプロジェクトもあって、さいたま市全体として、まだ元気な状態が続いていく。しかし将来的には確実に人口が減っていく。マネジメント計画には15%床面積を削減するという目標があったが、今回の施設の計画では15%削るというのはあまりうまくいかなかった。しかし、さいたま市としても人口の増加も続くということもあるし、地元としても決して悪くはない。市としては、財政的には難しいかもしれないが。

今日一緒に来た学部生の彼は浦和に住んでおり、与野本町駅から一緒に歩いてきたのだが、「このまちなんかいいですね、小学校のまわりの感じがいいですね」と、やはりまちづくりを勉強している彼がそう思ってくれて私も良かった。与野本町というこの地域の中心的地帯、やはり小学校のコミュニティ感がただよってくる。埼京線ができて、与野本町の駅ができて利便性がよくなり、本当に良いまちの感じがずっと続いている。さいたま市全体として、もう少し元気な状態が続くので、今できている計画、決して悪くはないと思っている。これからますます運営が大切になってくると思っている。

【事務局】

午前中にどういった話になったかについて、事務局から報告させていただく。

まず、事務局から資料1-1、1-2、2、3を使って、現状の複合施設の状況、アプローチなどを含めた施設の使い方、営業時間等について説明した。憩いの庭に関しては、資料3で説明し、今後具体的な作業や役割分担、今後一緒に管理していただく方について意見交

換をさせていただきたいと考えていたが、今回はあまり時間がなく、事務局から説明してすぐに意見をいただくのは難しいところもあったので、事務局の方で論点を整理して、次回また話し合いをすることになった。

地域サロンについては、主に質問であったが、例えば夏の暑い時に気軽に寄れるようなところなのかという話があり、基本的には、どなたでも自由に入って、交流をしたり、休んだりできる施設なので、開いている時間であればいつでも気軽に立ち寄れる施設であると説明した。例えば子どもが勉強で机を使うとか、寝てしまっている人がいたらどうするかといった、細かいルール作りについては、今後、話をしないといけないと考えている。人に迷惑をかける人がいた場合にどうするかということについては、警備室に人を置くことで対応したいと事務局からは話をした。

全体の駐輪場、駐車場の話があり、資料1-1の2ページ目の全体配置図に駐輪場20台とあるが、少し少ないのではないかというご意見があった。駐輪場の利用者としては、施設の利用者、放課後児童クラブに送り迎えをするお母さん方などが想定されるが、今現在放課後児童クラブの送り迎えについては、学校西側のスペースで駐輪していることもあるので、具体的に学校の駐輪場がどれくらいあるのか、コミュニティセンターの駐輪場にどのくらいのキャパシティがあるのかというところを把握しきれていないので、西側、南側で整理してもう一度、次回にご報告することにした。

施設関係は、駐輪場と関連するが、来館者、放課後児童クラブの送り迎えなどの基本的なアプローチについては東側を想定しているが、放課後児童クラブについては、西側からもアプローチできることから、来館経路や動線についても論点を整理して報告したいと思う。

資料4の愛称、名称について事務局から説明させていただいた。条例としての名称はないということ、愛称を付けている施設の例もあるという説明をし、もし愛称を付けるのであれば、市報掲載などのスケジュールを踏まえると、そろそろ方向性を決めて動かないといけないという話をした。これについては様々な意見を頂いた。

森委員からは、元々小学校自体がコミセンとの複合施設になっているので、何か名前があった方が良いのではないかというようなご意見をいただいた。また、「与野本町小学校複合施設」だと少し長すぎるのではないかというご意見をいただいた。

渡邊委員からは「与野本町小」という名前を残していったほうが良いのではないかというご意見をいただいた。愛称つけても例えばプラザノースという複合施設があるが、地元でプラザノースという名前がそれほど知られてないところがあるので、施設の看板には、実際に入居する施設の名前を大きく併記して書く方が望ましいのではないかというご意見をいただいた。

望月委員からは、愛称をつけたほうが良いのではないかというご意見をいただいた。例えば、与野本町はバラのまちなので、「与野本町ローズセンター」といったような名前などをつけたらどうかというご意見をいただいた。

浮田委員からは、西側が小学校で、東側が複合施設という感覚があるので、東側に「与野

本町小学校」という名前をつけた看板がつくと、なんとなく小学校の施設に見えてしまうし、学校の一部という感じでオープンな感じがしないように思われるので、愛称は付けられない方がよいというご意見をいただいた。愛称を付けると中に入っている機能というものが明確にならないので、看板としてはつまらなくなってしまうが、入る施設の名前を明確に併記したほうがよいのではないかとということだった。

岩崎委員も、浮田委員と同じで、愛称はつけずに、入居する施設を併記すればいいのではないかとご意見だった。

事務局としては、これまでの市内で先行している事例からすると、スタンダードなのは、入る施設名を看板に併記するものであり、子育て支援センター、児童クラブ、与野郷土資料館というものを看板に併記するというのがよいのではないかとということをお話した。

最後に浮田委員からは、地域サロンの部分について、子どもたちが遊びの待ち合わせに使うときに、「地域サロン」という言葉ではなく、もう少し違う言い方の名前があると親しまれるのではないかとご意見をいただいた。

【小笠原会長】

私は与野本町小学校が嫌だというのなら、「与野本町複合施設」はどうかと提案した。別の委員からは「中央区」とつけるのはどうかという意見もあった。

【事務局】

事務局として、いただいた意見を一度整理するが、基本的にはサインの表示を工夫させてもらうこととし、「地域サロン」の名称であれば、運営準備協議会のメンバーで決めていけると思うので、地域サロンに愛称を付けるかどうかということについては、次回案を持っていきたいと思うという話をした。

【志村教授】

今回の第2回の運営準備協議会の資料を送ってもらったときに、事務局に返した一番のポイントとして、地元の方々が複合施設の情報を知っているのかをまず確認した。これまで報告会を開いたが、今の市民の方はそれほど意識していない。昔はコミュニティがしっかりしていたのが、どこのまちでもどんどんなくなってきている。

先程、校長先生が、思ったよりも子供たち、お父さんお母さん方が知らないといわれていて、校長先生もやっぱりいいことを言っていた。資料を取り寄せて説明したと。関心がどれだけあるか。この施設は、複合施設であり、やはり与野本町のまちにとって良いことである。結果として良いものができるので、これはやはり地域として関心をもっておかない手はないと思う。

それで関心を持つのに、色々広報するということもあるが、やっぱり名前を募集するというのは、関心が高まるきっかけになる。名前を付けるというのは、自分たちのものにするという意味がある。併記で基本的にはいいのだが、愛称なので、あまり堅いことを考えないで進めたらどうかと思う。

午前中の意見交換はすごく良い意見交換であり、ほとんど私が言おうとしていることが

そのまま出ていた。ポイントは地域サロンである。今回のワークショップは、複合化になるのだからワクワクするような、交流シーンカードという、大学の方で皆さんから出た意見をまとめてカードにしたものをつくり、ワクワクするような施設にするというのがずっとあった。そのワクワクをどうするかということで、建築的には、地域サロンというアイデアに行き着いた。だから、それが地域サロンと呼ばれるままというのはちょっと寂しい。だから、愛称なので、地域サロン部分を示すのか、全体を示すのか、ちょっとファジーでぼんやりとしていても別にいいと思う。

【小笠原委員】

ローズはどうだろうか。

【渡邊委員】

ローズサロンだと変なので、ローズでいいのでは。

【志村教授】

私は、やはり公募する方が良いと思う。10月末までに募集をして、11月に運営準備協議会で選定するスケジュールでやると、地域の方々の関心が高まるし、最終的に運営準備協議会で選定していくことになる。やはりこれはやった方がいい。

【小笠原会長】

時間的に間に合うのか。

【事務局】

今からなら間に合う。午前中で帰られた委員の方々がいるので、公募の準備はさせてもらい、次回の運営準備協議会で、こういった形で準備を進めているがどうかということをもう一度諮るということではいかがか。

【渡邊委員】

例えば、与野本町小学校の子どもたちだけに公募するのはどうか。それは公募とは言わないのか。

【事務局】

志村先生が言われるように、多くの方に関心を持っていただくための公募ということであれば、小学生だけよりも、中央区内であるとか、全市かという形になろうかと思う。

【渡邊委員】

変な名前が沢山来てしまっても嫌だ。

【小笠原委員】

色々来るだろうが、選ぶのは運営準備協議会になるわけだから。

【渡邊委員】

公募を今まで何度もやってきたが、「北区」を決める時だって結局、「北区」が一番多くの票を集めたわけではなかった。「緑区」が一番多かった。しかし、市が勝手に「北区」にした。私は「緑区」にしたかったし、「緑区」が一番多くて喜んでいたら、いつの間にか「北区」になっていた。結局公募をやっても意味がないとずっと思っていた。

【事務局】

例えば、区の公募の場合は、北区が○票、○区が○票と、一度市民の方から票を集めて、上位のものを有識者会議に諮って決めるというパターンだったと思う。今回も、市民に募集して、最終的にこの準備協議会で決めることとなるのではないかと思っている。

その場合、必ずしも多数意見に決定するとは限らないので、不満を持つ方も当然いらっしゃると思う。そこが難しいところである。

【渡邊委員】

それは仕方がないということか。

【事務局】

そういうことになる。

【志村教授】

完全に市でクローズドではなくて、運営準備協議会の中で、協議会で市民も入って決める。

【小笠原会長】

運営準備協議会の中で、多数決で決めるということになるのか。やはり、皆知らない。我々携わったものは複合施設と知っているが、なかなか、PR不足で知らない。

【渡邊委員】

市外の人の方が良く知っている。諸富先生が本にまで書いているので、ちょっと読んだことがある方は沢山いるので、さいたま市はすごいですねと、私は皆に言われているから引くに引けない。

【小笠原会長】

私も自治会でこういう複合施設ができるんだという話は、何度かしている。それは各自治会の理事の方に話をしているのであって、私が話しても忘れてしまっているかもしれないし、やっぱりそんなに知らない。関心が少ない。これを広げるにはどうしたらいいだろうか。埼玉テレビで宣伝をしたらいいのか。

【渡邊委員】

テレビで宣伝すると子育て支援センターには人が沢山来すぎてしまうかもしれない。

【小笠原会長】

今も学童に入りきらないで、他のところに行っている。与野本町放課後児童クラブは60人と説明があったが、この施設はいい施設だから入りたいと思う。郷土資料館と、地域サロンと、私はとても良い施設だと思う。

【志村教授】

手狭なのかもしれないが、面積削減の目標があったが、それは結果として達成できなかったかもしれないが、内容としてはかなり良いものになっていると思うので、あとはポイントは地域サロンで、やはり社会の中で、居場所づくり、専門家の中では「サードプレイス」という言い方があるが、地域サロンや郷土資料館は、可能性としてすごく色々なことがある。かちっとした放課後児童クラブにならないかもしれないが、別に地域サロンに入り浸って

いてもよいわけである。中学生や高校生たちが地域サロンに入り浸っても別にいいわけである。

やっぱり、しっかりと関心を持っていただくために、色々なことをする、その一つとして名前は公募する。たくさん応募が来て大変かもしれないが、市も手伝ってくれるので大丈夫だろう。

【松本委員】

沢山の票を集めたものに決めるという訳ではないということか。2番目の名前になるかもしれないということか。

【志村教授】

そのとおりである。多数決ではない。数が多いというのは当然有力ではあるが、やはりそれだけでは決まらない。議会の多数決ではない。ここはみんなで知恵を出し合う場である。皆でわいわいやりながらやっていけたらと思う。

【小笠原会長】

いい名前が出ると良いと思う。

【渡邊委員】

自分も案を出せばいい。

【志村教授】

ローズや、サロンなどで基本的には良いように思う。

【渡邊委員】

一番聞きたかったのは、去年の9月の意見交換会にあれだけ盛り上がって、公共施設マネジメントとして、どこで着地するのかということが見えなかった。新しいことなので。すぐわからなかった。世の中からすごく注目されてしまっているのに、どうしたらいいのかわからなくて、今回公募に手を挙げた。9月からずっと苦勞をされてきたことがずっとオープンになっていない。志村先生一人が役所と戦って苦勞をしてきただけで、全然それまでの沢山頑張ってきた人たちに共有されていない。そこがすごく残念だった。

【志村教授】

今回、市には与野郷土資料館の説明をしっかりと具体的にしようお願いした。

【渡邊委員】

すごく細かく説明あった。

【小笠原会長】

すごく良かった。

【志村教授】

与野郷土資料館にはかなり勞力を要した。

【松本委員】

市役所の中でも、課同士で意見を合わせていただかないと進展しない。その辺は、複合施設で3つの課で、同じように足並みをそろえて、建設に向かってもらわないと、また遅れて

しまうし。先生の方も苦勞するので、市の方も足並みをそろえてドンといってもらいたい。

【小笠原会長】

各自治体の会長として、上峰の会長、私が大和町の会長、仲町の岩崎さん、上町の会長、下町の一部もあるので、自治会で、説明してもらうとかなり浸透すると思う。月1回会合がある。

【事務局】

今日の内容のようなものを我々の方で自治会の方に説明するというのでよいか。

【小笠原会長】

今回の資料があれば足りるので、こういう施設ができるという説明をして、浸透していかないと。

【事務局】

具体的には、自治会の方々にアナウンスするには、どういう単位の集まりに出向けば一番良いか。

【小笠原会長】

西与野は10町会があつて、会合が年に3~4回あるから、それには出てもらえるのではないか。ただ、43ある自治会、下落合、上落合をどうするかだ。

【事務局】

会長に個別にどうしたらよいかをご相談したらよいか。

【小笠原会長】

この間各自治会の代表が来て集まった時に、私もずっとかかわっているという説明をしたからわかっているとは思ふ。

【松本委員】

どの範囲までやるかだが、大戸や上落合の方は関心があるのだろうか。

【小笠原会長】

資料館などは、今日説明を受けて、これはワクワクするよう施設である。すごいなと思った。

【渡邊委員】

ボランティアさんはむしろ遠くからでも来ていただけるのであれば、来ていただいた方が良い。

【小笠原会長】

広げないとね。知れ渡らないとだめだということだ。

【渡邊委員】

子育て支援センターは便利なので、結構遠くから来られるという説明だった。

【事務局】

愛称の話は、並行して準備しながら、次回、案出しをする。愛称を募集する方向で進める。

【小笠原会長】

午前中は、愛称を募集するか決めていなかった。

【事務局】

愛称を募集することは事務局だけで決められる事項ではなく、施設そのものの愛称を決めるということであれば、市長まで話を持っていかなければならないので、この場でやり直すとは言いづらい。

【志村教授】

資料を送ってきたので、市はやる気で準備しているのかと思っていた。やはり自分たちのものにするためには愛称を付けた方が良い。

【事務局】

地元自治会に対するアナウンスについては、改めて相談する。

【渡邊委員】

広報をどうするかということも含めてということか。

【事務局】

そうである。チラシをまいたり、市報に載せたり、ホームページに載せたりすることは当然やっていくが、それ以外についてどういう形で広報をしていくのか、自治会に回覧を回すのが良いのか、説明会をした方がよいのか、そういったところも個別に会長と相談しながら、次回の議題にさせてもらえればと思う。

【小笠原会長】

各自治会に回覧すれば、全部見ない人もいるかもしれないが、回覧した方が良いかもしれない。こういうものができますと。子育て支援センターが応募過剰になってしまうと困るけれども。

【渡邊委員】

子育て支援センターの利用者は0～3歳なので、どんどん卒業していくから大丈夫ではないか。

【小笠原会長】

回覧が良いかもしれない。知れ渡るし、それでわかるような気もする。

【松本委員】

宣伝は必要かもしれない。知らない人が多いし。

【志村教授】

カフェのことはどうか。

【事務局】

カフェについては、喫茶コミセンは撤退ということで、事業者の募集を行ったところ、募集に応じてくれる事業者がいなかった。ただ、人との交流というコンセプトを前回の意見交換会でいただいているので、障がい者団体、障がい者施設の利用者が運営するピアショップという制度があるので、そこに設置できないかどうかについて、障害政策課を通じて各団体に接触をしているという状況である。

ピアショップについては、毎日やっているところはあまりなくて、週2～3回というところが多いのだが、そういうところがあるので、自販機などの充実も含めて、考えていきたいと説明した。

これに対して、望月委員からは、最近は豆を挽いてコーヒーを淹れてくれるような少し高級感のある自販機もあるので、そういったものを入れるということでもいいのではないかとのご意見をいただいた。

【松本委員】

昼食の軽いもの、パンなどが出る自動販売機もあったと思う。

【渡邊委員】

こちらに来た時にはいつも喫茶コミセンで食事をしていたが、本当に人がいない。今日は区役所の食堂に初めて行ってきたのだが、ランチが2種類あって、あと麺類で、あれならば3人いればできる。例えば、ここから一番近い調理師学校は、国際学院だろうか。とにかく当たるところに全部当たる。例えば、そこでうまく組織ができるのであれば、来る人は毎日同じ人ではなくても、ちゃんと昼食やランチができると良い。この辺はランチが食べられるところがない。

【小笠原会長】

喫茶コミセンは少し暗くて、やっているかやっていないかわからない。

【渡邊委員】

もっとオープンな形にしないと、一般の人は入りづらい。

【小笠原会長】

もう少し来館する人が増えると、お店にも人が入るようになるかもしれない。

【渡邊委員】

例えば文京区役所のようにもっとオープンにするのはどうか。市民食堂とか。

【松本委員】

あれもやってはいけない、これもやってはいけないと、食べ物も飲み物も持ってきてはいけないとなんだかんだと、案外厳しい。薄暗いし、習い事の人しか来ないし。終わったらさっと帰ってしまうし、それでは、コーヒーでも一杯飲みましょうという雰囲気がでないから、寂れてしまった。もう少しオープンにして、自由に入ってきてやれるようにすれば。ただ、少し経営のノウハウが必要だと思う。

【渡邊委員】

経営のノウハウは、だれか専門の人が一人つけば、何とかなるのではないかと。小児医療センターでは、常設で障がい者がお店をやっている。健常者が何人も毎回ついている。もしどうしてもということなら調べてくる。

【事務局】

この公募については、何の制限もせずに公募してどなたも来ていただけなかった。

【佐田委員】

公募はホームページで行ったのか。

【事務局】

ホームページで行った。

【佐田委員】

どこまで宣伝していたのか。本部に報告書を出したときに、「えっ、こんなのをやっているの？」という話になった。

【渡邊委員】

本部とはどこの。

【佐田委員】

私はさいたま市社会福祉事業団から来ており、与野には障がい者の施設がいくつかある。

【事務局】

やってくれそうなところはあれば、ぜひお願いしたい。

【佐田委員】

あまりにも締め切りが近くて、色々な手順を踏まないと簡単には出られないので、こんなことをやっていたんだという声が出たので。でも今らかでは準備も間に合わない。それこそ、理事会にかけないとだめなので。どの時期にやっていたのかなど。

【事務局】

市民局の方でやっているのだが、今までに頂いた色々なご意見を踏まえて、手を尽くしているつもりではあるのだが、ここでやってくれる人がいるのであれば是非お願いしたいと考えている。

【松本委員】

人件費も、3人雇えばできるといっても、3人分の給料を1ヵ月で果たして稼げるかという、赤字だと撤退する。

【渡邊委員】

人が集まらないところだから。もっと人が集まる場所だったらいいのだが。来る人がある意味決まってしまうから。もし食堂みたいにするのであれば、外の人をどれだけ呼べるかを考えないといけない。なぜ東京の区役所が成功しているかという外から物見遊山に行く人が一杯いるからだ。どここの区役所に食べに行ったとか、皆言っている。

【松本委員】

コミセンは何を使ってはいけないとか、結構規定がうるさい。使い勝手が難しいから、習い事をしたら、皆、さーっと帰ってしまう。外で飲んだり食べたりしている。あそこで一服という感じがしない。ゆっくりする人がいないというのが事実。

【志村教授】

やはりカフェの公募に人が集まらないというのは、複合施設の内容を皆分かっているのかという、さっきの話に繋がる場所がある。今回の複合施設で、地域サロンや郷土資料館、子育て支援センター、児童クラブと複合されるということが分かっている。ただ単に書類

をみただけでは事業者はわからない。

【事務局】

考えられる範囲でやってはいるのだが、事業者に直接あたっていくというやり方が良いのだろうか。

【渡邊委員】

公共施設マネジメント係の方がやっているのか。

【事務局】

事務は、コミセンの元締めであるコミュニティ推進課が行っている。

【志村教授】

縦割りの中で、コミュニティ推進課に複合化の話がちゃんと伝わっているか。

【事務局】

コミュニティ推進課も先ほどの準備協議会に担当者が出席し、意見交換会にも参加して、一緒に検討をしているメンバーの一人であるので、伝わってないということはない。

【小笠原委員】

区役所のコミュニティ課の職員は、今日は誰も来ていないのでは。

【事務局】

中央区のコミュニティ課ではなくて、コミセンの元締め手であるコミュニティ課の職員が来ていた。

【小笠原委員】

今日みたいに午後に会議あった時に、そのサロンで食事でもできれば、我々も遠くまで行かなくてよくなる。それから、子供の授業参観の帰りにお茶飲んだりできればよいかもしれないし。利用者が増えればペイするかもしれない。あるいは自動販売機の方が良いかもしれない。資料には両方置くとなっているけれども。

【志村教授】

ワークショップのメンバーはずっとやってきたので、すごく理解をしている。空間というか、施設がどういう風になるかイメージがある。だけどやはり新たにきた課の担当の方は、図面をみないとわからない。それがポイントになっている。ただ資料を準備して説明をしても、イメージがわいているかどうか。イメージがわくような進め方をしないといけない。

【小笠原委員】

だから、9月の意見交換会でも初めての方は良くわからなかった。我々のようにレイアウトから検討した人はわかるけど。理解度が違う。

【志村教授】

模型を使って、交流シーンカードも作って。こういう状況になったので、募集をしている資料一式を私に送ってほしい。どういう書類で募集をしているか確認をしたい。

当面のところ、障がい者団体と自販機の設置で進めるかもしれないが、募集は、来年度も継続してやってもらいたい。施設ができるので、できてからであれば、これはいいと思って

入ってくる事業者が確実にいると思う。

【松本委員】

自動販売機は、最終でも平気ではないのか。

【志村教授】

できたら自動販売機だけではもったいないので、うまく労力をかけないようにランチを提供するだとか、色々考える人たちがいると思う。

【渡邊委員】

ケーキ作りが好きな人などは、友達に沢山いる。売っているわけではないけれど、売り物になるようなものを作っている人もいるので、曜日ごとに違う人のケーキを売るということもできるのではないかな。

【事務局】

保健所とかの許可も必要になる。

【渡邊委員】

もちろん承知している。

【志村教授】

そういうお母さん方は図面を見ただけだとイメージがわからないが、実際建物ができると、これであればできるなと思われる方が絶対出てくると思う。コミュニティカフェという発想だと思う。施設的には給排水だとか、エネルギー関係は確保されているので、それで平面計画的にも元々カフェスペースなので、保健所も何とかかなと思う。

だから一つ目は、募集を続けてもらいたい。あと、スタート時に自販機だけで寂しい状態であっても、コミセンから抜ける動線は、すごく、はっきりとわかるようにしてもらいたい。この抜けが重要である。これがはっきりしないと、結局ドン詰まりで暗い感じで、そんなところで商売はできないといわれてしまうので、この抜けがあるということの中からも外からもちゃんとわかるように、下手すると自動販売機で扉を閉めてしまうことがあるかもしれないが、そういったことが無いようにしてほしい。これが二つ目である。この動線があるかないかで、地域サロンの利用状況が変わると思う。人が流れると思う。動線をしっかり確保してほしい。

【事務局】

承知した。

【小笠原会長】

先ほどの話で、駐車場の20台は良いが、駐輪場の20台というのはやっぱり少なすぎる。

【松本委員】

入口の植栽のところに駐輪場を作るのがベターだと思う。

【事務局】

コミセンとの動線をきちんとすれば、コミセンの方にも駐輪できる。

【渡邊委員】

コミセンの駐輪場は広いので、今は汚く停めているので、あれをきれいに停めるようにすれば、スペースは沢山ある。

【事務局】

最後に、資料館のボランティアについて、博物館の担当からご説明し、これについては、岩崎委員からこの第1展示室のような取り組みというのは博物館で珍しいというご意見をいただいた。

【松本委員】

資料館のドアの自動化の話はどうなったのか。

【事務局】

資料館の入口の自動ドアについては、建築基準法の問題などがあり、上手くできなかったのだが、今やろうとしているのは、常時開けっ放しになっていて、学校の廊下などで火事になると閉まる扉が廊下にあると思うのだが、そのような扉を郷土資料館の入口の両側に納めておいて、常時開いていて、火事になったら閉まるものにしようとしている。

博物館が閉館後には、締めていかないと管理上支障があるので、シャッターのようなものを設置することで現場と調整をしているが、シャッターを天井懐に納めるのは難しい状況である。そのため、上からのシャッターではなく、横引きのドアのような、パタパタってなるようなものをつける方向で、調整を進めている。ただ、開館しているときは常時開いていて、廊下のように行き来ができるようには変えていく。資料6-1の1ページ目に入口の絵が出ているが、開館しているときはこういう形で開いている状態になる。博物館が閉まった時だけシャッターを閉めるという運用になる。

【渡邊委員】

コミュニティ推進課がずっと担当しないのは、例えば、財政局財政部資産経営課公共施設マネジメント係が担当しているのか。

【事務局】

そうである。

【渡邊委員】

コミュニティ推進課が担当するということはある得ないのか。

【事務局】

コミュニティ推進課は、こちらの複合施設側というよりは、コミュニティセンターの所管になるので、それこそ縦割りといわれてしまうが、それぞれの施設で担当課がいるので、それを全体で調整をしているのが我々資産経営課になる。

【渡邊委員】

公共施設マネジメント係には何人いるのか。

【事務局】

4人である。

【志村教授】

博物館の入口はとにかく良い方向に進んでいるということで、よろしくお願ひしたい。
横からのシャッターの納まりについてはまた教えてほしい。

【事務局】

承知した。

【志村教授】

資料館ボランティアは、地域の方々に複合施設のことを知ってもらい、関心持っていただければボランティアは集まると思う。事務局の体制とスケジュールのこともあるのだが、できるだけ私とのスケジュール調整もうまくやってもらえると、と思う。ピンポイントで日程を言われても、調整しようがない。

【事務局】

委員の方々のご都合で集まっていたいでなかなか難しい。

【志村教授】

事前にメールのやり取りだけで終わってしまうのはやはりまずいと思う。せめて大学に来てもらいやり取りしないと、アドバイザーとしての責任を果たせない。今後のスケジュール調整はうまくやってもらいたい。

【小笠原委員】

今度の運営準備協議会は、8月5日、9月2日の午後である。

【志村教授】

両方とも駄目である。各年度のスケジュールを秋口に決めなければいけないというのはわかるが、第2回の運営準備協議会がずれ込んでいるので、この時期に協議会を入れても、色々決まらないことが出てくると思うので、臨機応変に、私もこちらに来るので、秋以降も話し合う場をセットするように考えてもらった方が良いと思う。急いで9月までにやっても決まらないのではないかな。

【事務局】

今予定しているものについては、話し合いの場を設けさせてもらった上で、愛称の公募については、愛称の案を市民の方に頂いて、この場で話し合っていたくためには、9月までにそれを準備するのは難しいので、少なくともそのために集まっていただく必要が出てくる。それ以外にも3回だけで終わらなかった分については、調整して秋以降もこの場を設けていければと思う。そのための日程調整をさせてもらえればと思う。

【小笠原会長】

もともと3回で終わるかもしれないということで、第4回目は日程をずらせるのではないかな。志村先生の都合を聞いてやったらどうか。

【志村教授】

9月9日（月）の午後であれば時間があるが。

【金子委員】

9月から議会が始まるため、ちょうど質問される時期と重なってしまうため、今ここで日

程を決めることが難しい。

【小笠原会長】

先生の都合の良いところを聞いておいて、調整したらどうだろうか。

【事務局】

議会の前ということで、9月2日を設定した。

【小笠原会長】

議会が終わるのはいつか。

【事務局】

終わるのは、10月半ばになる。ただ、その間全て駄目ということはないが、9月9日あたりは、質問通告の時期であるため、職員が出られなくなってしまう。候補日をいくつかいただいたうえで、皆さんと日程調整をさせていただきたい。

【志村教授】

8月26日（月）はどうだろうか。

【事務局】

全ての委員がそろっている訳ではないので、候補日を聞いておいて、調整させていただく。

【小笠原会長、松本委員】

8月26日（月）は空いている。

【志村教授】

8月26日までに実質的に目途がつくのかということである。議会でうまく説明していただかないと来年度の色々なことも対応できなくなってしまう。とにかく愛称の募集をするということになったら11月頃にはやらなければいけないわけである。

【事務局】

そうである。並行して8月の段階で公募するという方向性にしていきたいと思う。

【志村教授】

今後、学生の彼もさいたま市の市民ということで研究のためにお邪魔させてもらうことがある。彼から連絡を取らせてもらうことがあるがよろしくお願ひしたい。

【事務局】

承知した。